

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<https://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>

第 3 報
千葉県農林水産部
令和7年6月18日

「ふさおとめ」は穂肥の時期です 生育に応じて穂肥の時期・量を調整しましょう

〔生育概況〕

関東甲信地方は平年より3日遅い6月10日頃に梅雨入りしました。6月以降、気温はやや高め、日照時間は平年比88%と少なめに推移しました。気象庁によると今後2週間は気温が高いと予想されており、生育が早まる可能性があります。

現在の生育は、茎数は平年並ですが、草丈はやや長く、葉色は並～やや濃く推移しています。

（表1）4月20日植えの「ふさおとめ」「ふさこがね」の幼穂形成期は概ね平年並み、「コシヒカリ」「粒すけ」は6月20日頃からとなる見込みです。「コシヒカリ」などで倒伏が懸念される場合は、生育状況を確認し、穂肥の施用時期・量を判断しましょう。

表1 品種別の生育状況（6月15日現在）

品種	植付時期	平年比※1			
		生育進 度※2	草丈	茎数	葉色
ふさおとめ	4月20日	並	やや長	やや少	やや濃
ふさこがね	4月20日	並	やや長	並	並
コシヒカリ	4月20日	並	やや長	並	やや濃
	5月 1日	並	やや長	並	並
粒すけ	4月20日	並	並	並	並

※1 平年比は過去10か年（2015～2024年）の平均値との比較。

※2 幼穂形成期の実績値および予測値により判断。

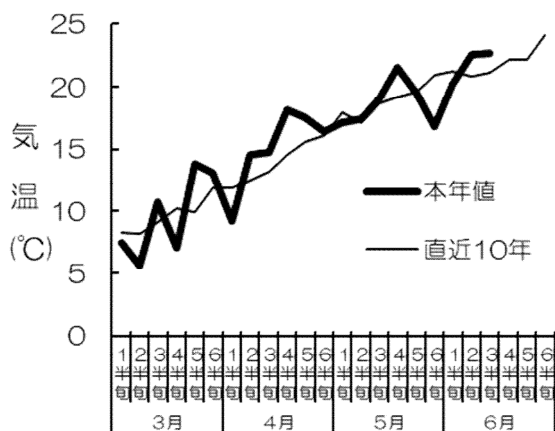


図1 日平均気温の推移（アメダス、佐倉）

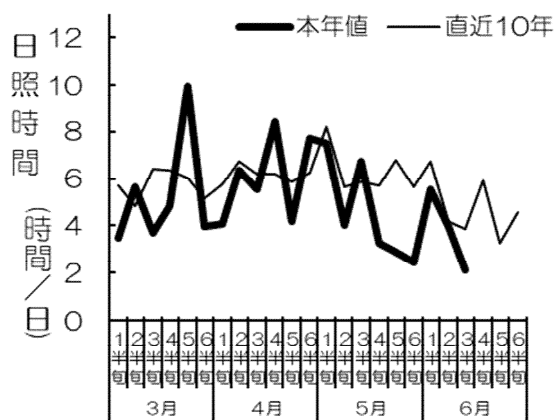


図2 日照時間の推移（アメダス、佐倉）

[これからの管理のポイント]

■穂肥は遅れないようにしましょう

「ふさおとめ」「ふさこがね」は既に穂肥の時期に入っていますので、遅れないように施用しましょう。「コシヒカリ」「粒すけ」はこれから幼穂形成期となりますので、それまでに中干しを終了します。特に「コシヒカリ」は草丈がやや長く、葉色がやや濃く推移しているため、穂肥を施用する際は、必ず幼穂長や生育状況を確認し、施用の時期・量を判断しましょう。（表4）

○穂肥の実施

穂肥の施用時期が早いと倒伏や籾数過剰による登熟不良や玄米外観品質低下を招くおそれがあります。品種別・地域別の幼穂形成期予測及び穂肥施用適期の目安（表2）を参考に、穂肥を施用しましょう。

表2 品種別・地域別の幼穂形成期予測及び穂肥施用適期の目安

品種	植付時期	幼穂形成期予測				穂肥施用適期の目安
		県北 (香取市)	九十九里 (横芝光町)	内湾 (千葉市)	県南 (館山市)	
ふさおとめ	4月20日	6月17日	6月14日	6月11日	6月11日	幼穂形成期から1週間以内 【幼穂長 1mm～1cm】
ふさこがね	4月20日	6月18日	6月15日	6月12日	6月12日	幼穂形成期から7日後頃 【幼穂長 1cm】
コシヒカリ	4月20日	6月26日	6月23日	6月20日	6月20日	幼穂形成期7日後頃～ 15日後頃の間 【幼穂長 1cm～8cm】
	5月 1日	7月1日	6月29日	6月26日	6月26日	
粒すけ	4月20日	6月24日	6月22日	6月19日	6月19日	幼穂形成期から7日後頃 【幼穂長 1cm】
飼料用米 (アキヒカリ)	5月15日頃	6月24日頃～				幼穂形成期前5日頃から 幼穂形成期後5日頃 (ただし、最高分げつ期に葉色 が低下した場合は、すぐに追肥)
飼料用米 (夢あおば)	5月15日頃	7月3日頃～				

※幼穂形成期については、水稻作柄安定対策調査結果と生育ステージ予測システム（千葉県試験研究成果普及情報）を基に予測。

各品種の10a当たりの施肥量は、窒素と加里を成分量で各3kg（房総南部の粘質土では、窒素成分を「ふさおとめ」は1～2kg、「ふさこがね」は2～3kg、「コシヒカリ」「粒すけ」は2kg）です。

幼穂形成期の目標生育量（表3）を参考に、生育量が目標を超えている場合は、施用適期の範囲内で追肥時期を遅らせた上で、減肥しましょう。

近年、秋の長雨・台風により、倒伏するほ場も多くみられますので、幼穂形成期の目標生育量（表4）を参考に、施肥量を調整しましょう。

なお、「飼料用米多収品種（専用品種）」の10a当たりの施肥量は、窒素と加里を成分量3kg（ただし、たい肥を施用している場合は、窒素のみ3kg）が目安となります。

表3 幼穂形成期の目標生育量

品種	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)			葉色 (カラー スケール値)
		砂質土	壤質土	粘質土	
ふさおとめ	55 以下	570~620 (31~34 本)		520~570 (29~31 本)	4.0
ふさこがね	60~65 以下	450~500(25~27 本)			5.0
コシヒカリ	70 以下	430~560(23~30 本)			3.5~4.0
粒すけ	65 以下	590 (32 本)	550 (30 本)		5.0

※茎数の () 内は 30cm×18cm で植付された時の 1 株平均茎数

表4 幼穂形成期における「コシヒカリ」の穂肥・倒伏軽減剤の要否判定

葉色 (SPAD 値) × 茎数 (㎡当り)	カラースケール値 (※)			草丈 (cm)	予測される 生育・収量	対策		
	3.5	4	4.5			穂肥 加減	穂肥 時期	倒伏 軽減剤
16,000 以下	560 以下	490 以下	440 以下	70cm 未満	籾数が不足し、 やや減収	増肥、または時期を 2〜3 日早める。		
						×		
16,000 ～ 20,000	560 ～ 700	490 ～ 600	440 ～ 550	70～ 80cm	目標どおりの 生育が期待 籾数確保のため 穂肥は必要 稈長が伸び、 倒伏が心配	標準量	標準	×
						標準量	標準	必要
20,000 ～ 27,000	—	600 以上	550 以上	75cm 未満 75～ 82cm	籾数過剰と なり、乳白米の 発生が心配 稈長が伸び、 倒伏が心配	減肥（窒素施用量 1～2kg／10a）し て時期を遅らせる か、または無施用。		
						×	×	必要

※カラースケール値とおおよその茎数 (m²当り) の関係は、SPAD 値とカラースケール値との
換算式に基づき、目安として示した。

■高温登熟障害を回避する施肥管理

出穂期後 20 日間の平均気温が 26℃ を超えると、白未熟粒 (高温登熟障害) が多くなります。白未熟粒対策として、出穂期前 7~5 日 (穂ばらみ期) に葉色を確認しましょう。

葉色が淡く目標値に達しないと予想される場合は、10a 当たり窒素量で 1 kg を上限 (食味低下を防ぐため) に追肥を施用しましょう (表 5)。倒伏回避のため穂肥を減肥又は無施用とした場合は、葉色の低下が懸念されますので、出穂期前 7~5 日の葉色を確認した上で追肥するか判断しましょう。

表5 各品種の出穂期の葉色目標及び軽減対策における対策時期と施用窒素量

品種	葉色 (SPAD 値)	対策時期	窒素量
ふさこがね	36.5	出穂期 7~5 日前	1 kg/10a 以内
コシヒカリ	34.4		
粒すけ	34.0		

※「コシヒカリ」の葉色 (SPAD 値) 34.4 は葉色カラースケール値で概ね 4 に相当

■水管理

幼穂を確認したら入水を開始し、出穂 3 週間前から出穂 2 週間後までは湛水管理を行います。（自然由来のカドミウムの吸収を抑える技術です。）

また、冷害危険期となる幼穂形成期 10～15 日後（出穂期 15～10 日前）に、日平均気温 20℃以下の低温の持続が予想されるときは、幼穂を保温するため「深水管理」にします。

特に耐冷性が弱い「アキヒカリ」、「夢あおば」の 4 月植えについては注意しましょう。

表 6 冷害危険期予測（冷害危険期は記載日から 6 日間）

品種	植付時期	県北 (香取市)	九十九里 (横芝光町)	内湾 (千葉市)	県南 (館山市)
ふさおとめ	4 月 20 日	6 月 27 日	6 月 24 日	6 月 21 日	6 月 21 日
ふさこがね	4 月 20 日	6 月 28 日	6 月 25 日	6 月 22 日	6 月 22 日
飼料用米(アキヒカリ)	5 月 15 日	7 月 4 日～			
飼料用米(夢あおば)	5 月 15 日	7 月 13 日～			

■病害虫・雑草防除

○いもち病、稲こうじ病、紋枯病の防除

いもち病は、気温が低く、長雨や湿度の高い日が続くと発生が多くなります。止葉などの上位葉に葉いもちの病斑がある場合は、穂いもちに移行し減収するおそれがあることから、穂ばらみ期に治療効果のある薬剤で防除をしましょう。特に今年は葉色が濃く軟弱に生育しているので注意して下さい。

稲こうじ病は、穂ばらみ期が低温の場合や降雨が多い時に発生が多くなります。玄米に稲こうじ病が混入すると規格外になってしまいます。前年に多発したほ場では出穂期 10 日前までに、薬剤防除をしましょう。

紋枯病は、高温多湿で茎数が多いと発生しやすくなります。紋枯病による葉鞘の枯れ上がりは倒伏を助長します。近年では多肥栽培をする飼料用米栽培で発生が多いので、状況を確認しましょう。

表 7 いもち病、稲こうじ病、紋枯病の主な防除薬剤

薬剤名 \ 病害名	いもち病	稲こうじ病	紋枯病
ダブルカットフロアブル	○予防・治療		
ノンプラス 粉剤 DL/フロアブル	○予防・治療	○	
ブラシン 粉剤 DL/フロアブル	○予防・治療	○	
カスミン 液剤	○治療		
モンガリット粒剤		○	○
モンカット 粒剤/フロアブル			○
バリダシン 粉剤 DL/液剤 5			○

(※) 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍率、収穫前日数、総使用回数などが定められています。ラベルをよく読んで、適正に使用しましょう。

○イネカメムシ、斑点米カメムシ類

近年問題となっているイネカメムシは、水稻の籾を加害する斑点米カメムシ類の一種で、他の斑点米カメムシ類に比べて、出穂時の加害により不稔被害が発生し、直接的な減収被害につながりやすいのが大きな特徴です。不稔発生防止を目的として、成虫が侵入する出穂始め～出穂期（出穂直後から4～5割の穂が出穂した時期）を目安に薬剤散布を行います。



写真1 イネカメムシ

また、他の斑点米カメムシ類については、防除適期である出穂期 15 日後を目安に薬剤散布を行います。畦畔雑草は斑点米カメムシ類の生息場所となり、出穂前後の草刈りは斑点米カメムシ類をほ場の中に追い込みますので、出穂2週間前までに畦畔雑草を刈取ります。

詳細はP.7又は千葉県農林総合研究センター病害虫防除課ホームページの病害虫発生予報(第3報)P.3～4をご覧ください(右:二次元コード)。

農薬の使用に当たっては、収穫前使用基準等の登録内容を良く確認して、適期に防除しましょう。



○イネばか苗病の抜き取りの再度のお願い

本田で発生したイネばか苗病の株を放置すると、胞子が飛び、周りのほ場にも伝染します。特に、採種ほ場の周辺で本病が発生すると、優良な種子の生産に支障をきたします。本病の発生が見られたら、採種ほ場の出穂前までに罹病株ごと抜き取り、田んぼから離して埋却処理するなど、対応についてご協力をお願いします。



写真2 イネばか苗病

次回の「水稻の生育状況と当面の対策」は、6月27日に発行予定です。

白未熟粒の発生と斑点米カメムシ被害を抑えて、品質向上、収量増加

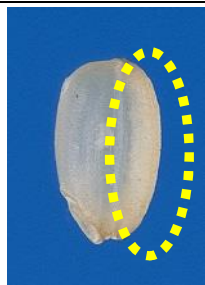
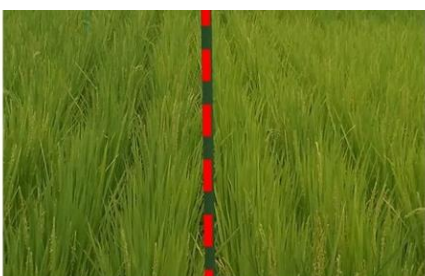
《はじめに》

近年、水稻の出穂期後の高温により、白未熟粒などの高温障害が発生しています。しかし、発生要因は高温だけではなく水稻の栽培管理にもあります。

白未熟粒は種類により発生要因が異なります。お手元に昨年産の米が残っていたら、白濁部位を確認し、発生要因に応じた対策を実施し、登熟を高め、品質向上と収量増加につなげましょう。

また、出穂期前後の水管理や、近年県内全域で問題となっているイネカメムシ被害の対策に取り組むことも、安定生産につながります。

■ 白未熟粒の種類による発生要因と対策（米粒の写真は農林水産省ホームページより引用。）

	基白粒	背白粒	乳白粒	その他未熟粒
白色不透明部の位置 (点線の囲み部分)				
主な発生要因	・出穂期後20日間の高温 (日平均気温が 26℃以上) ・出穂期の葉色の低下(光合成能力の低下)		・日照不足、出穂期後の高温やフェーン現象等の乾燥風による稲体水分の低下 ・籾数過剰や倒伏(籾数当たりのデンプンの転流・蓄積不足)	
対策	○出穂期前7～5日(穂ばらみ期)に、葉色が目標値に達していない場合は、速効性肥料で追肥を施用(窒素量で 1 kg/10aを上限)しましょう。  葉色が生育目標に達している水稻(左 SPAD:36.0) 達していない水稻(右 SPAD:30.8) (「コシヒカリ」、出穂期) ※ドローンで追肥する場合、ドローン専用肥料をお使い下さい。 例 空散追肥306 3.3 kg/10a Jコート Quick 2.5 kg/10a セントラル尿素 44.5 2.5 kg/10a CORON(液肥) 希釈倍率 2-5 倍		○目標茎数の8割(「コシヒカリ」は目標穂数の8割)に達したら、速やかに中干しを行い、過繁茂防止と根張の促進を行いましょう。  中干し時に溝切りを行った圃場  中干しによる「コシヒカリ」倒伏軽減の効果 (写真左:中干し無し、右:中干し実施のほ場)	

共通の対策

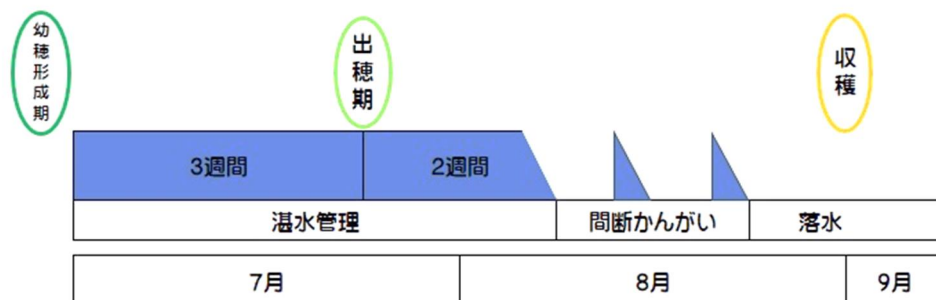


出穂期は、水稻生育予測システム「でるた」で予測し、実際にほ場で確認しましょう。

《対策1》根の活力を維持する水管理

出穂期の3週間前から2週間後までの期間は、湛水状態を保ち、その後は、登熟期間後半の根の活力を維持するため、間断かんがいとします。

収穫前の落水時期が早いと、白未熟粒が増加しますので、落水は出穂期後 25 日以降とします。
田面に大きな亀裂が入ると根が断絶され、登熟に必要な水分が不足しますので注意しましょう。



幼穂形成期以降の水管理の目安(「コシヒカリ」の場合)

《対策2》イネカメムシによる不稔、斑点米対策

近年、イネカメムシが多発生し、出穂時に加害され不稔粒が発生し、大きく減収をしたり、乳熟期に加害され斑点米(基部斑点米)が発生し品質が低下するなどの問題が発生しています。

イネカメムシは出穂直後の稲に飛来し、加害・産卵し、ふ化した幼虫も加害します。

イネカメムシ対策には、早めの防除が必要で、出穂期前の粒剤散布又は出穂期のフロアブル剤散布が効果的です。さらに、他の斑点米カメムシ対策としては穂揃期から乳熟期の追加防除も必要です。



イネカメムシに対する対策は、千葉県農林総合研究センター第 62 回試験研究成果発表会【作物部門】の YouTube をご覧下さい。(発表は、24 分 06 秒から始まります)



拡大写真

出穂直後に加害
(稲穂に止まる成虫)



イネカメムシの吸汁
による不稔(立ち穂)



乳熟期に加害されると基部(胚芽とその周辺)斑点米になる

全農千葉県本部・千葉県 令和 7 年発行